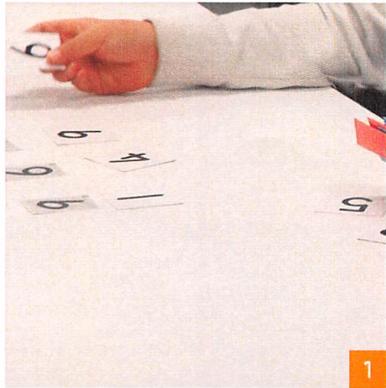


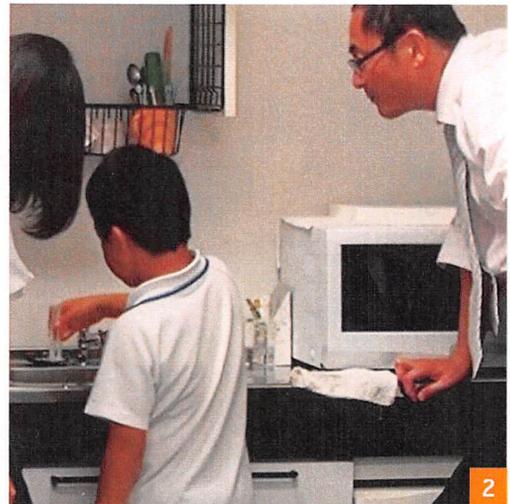
算数・数学クリニック

文学部 教育学科 穴田恭輔



1 10を作る数字カードを提示する

- 実施日：2015年4月8日～2016年3月30日
(いずれも水曜日) / 計33回
- 場 所：神戸女子大学 須磨キャンパス M館 M315 教室
- 対 象：地域の小中高生
- 主 催：神戸女子大学 文学部 教育学科 穴田研究室
- 参加学生数：4名



2 水を汲んでかさをはかる

「算数・数学クリニック」は松本博史元本学教授が2006年(平成18年)10月に開設し、その後2012年(平成24年)4月からは筆者が引き継いで現在も続けているものです。その事業内容は、本学周辺地域で算数・数学の学習につまずいている子どもたちへの学習支援です。学校では取り残されてしまうこともある子どもたちが学校での学習とは別に、丁寧に指導を受けられる環境があれば、自分に合ったペースでゆっくりと学習できると考え、寺子屋のように個別に指導を行っています。来訪する子どもたちを指導するスタッフは、筆者と小学校教員を目指す本学教育学科の学生たちです。また、本学の認知心理学、臨床心理学の専門家と連携協力体制をとることもあります。開設以来これまでに参加した子どもたちの延べ人数は1,900人を超えています。

この活動を通して、日常生活の中で「数量・形」に係る体験をすることの必要性を感じています。ここでいう体験というのは、日常生活の中で集合を作ったり、1対1の対応づけをする作業のことであり、実際にモノを数える作業の中で必要に迫られて10ずつまとめてみる、

いくつかあるものをそこにいる人たちに等しく分ける、1ℓの牛乳パックで水を汲むことでかさの量感をもつ、立方体展開図からさいころを作るなどです。これらの体験は、小学校の算数の学習内容の前倒して数詞や数字に急いだり、単に求答だけの計算操作を重ねるよりも、きわめて大切です。実際、幼児教室で算数の知識・技能を学ぶ幼児たちが多いのにもかかわらず、小学校の教師からは、計算はできるが数量・形の感覚が身につけていないことがよく指摘されています。「数量・形」の感覚を身につけるためには、指導者の意図的・計画的な「数量・形」に係る体験が必要なのです。

2015年度の「算数・数学クリニック」の活動では、就学前に必要な「数量・形」に係る具体的な体験が希薄だった児童について、その診断とそれに応じた指導によって学習遅延の解消を目指した結果、その成果も徐々に現れてきています。2015年度は計33回、毎週水曜日の15:00～19:30に開催し、参加した子どもたちは延べ人数で76人でした。